

子猫ダイアリー

福富雅樹【著】

一 序章

それはある満月の夜のこと。

一台の青いトラックが後ろの荷台に荷物をいっぱい乗せて、住宅街の道を走っていた。

道は悪路と言うわけでもないのに、積み上げられた荷物は積み方が悪いのかトラックの振動で激しく揺れ、今にも落ちそうだった。

そんな時、トラックのタイヤが道に落ちていた分厚い雑誌を踏んづけた。トラックが強く揺れ、段ボール箱が一つ、道に放り出された。

しかし、トラックは何事もなかったようにそのまま走り去ってしまう。後には段ボール箱が一つ、道の真ん中に残された。

冷たい風が吹き抜ける。

かさ、かさ、かさ、かさ

段ボール箱が小さく揺れ、横になった。

「ミヤー」

段ボール箱の蓋が開いて、白い猫が一匹顔を出した。

猫はキヨロキヨロと周囲を見回すと、静かに段ボール箱を出た。そして、後にはその猫の子供らしい子猫が三匹、白猫の後に続いて出てきた。

「ミヤー」

白猫は子猫たちの方を向いて、一度鳴くと、そのまま夜道を歩き始めた。

「ミヤー、ミヤー、ミヤー」

子猫たちも合唱するように鳴いて、親猫のお尻を追いかけていく。これから始まる物語のほんのプロローグであつた。

二朝

翌日の朝。

高校二年の娘と小学五年生の娘のいるここ町田家では、慌ただしい朝が始まつていた。

「あかり、何してるの！早く行かないと、学校、遅れるわよ！」

母親が階段の下で大きな声を上げる。

「わーつてるう！！」

高校生の娘はセーラー服を着ながら、面倒くさそうに返事をした。全く、もう。そんなに大声上げるなら、もっと早く起こしてくれればいいのに！！

あかりは愚痴った。しかし、本当は早く起こしても起きないだけであつた。

「あかり！早くしなさい！！」

母親の声がさつきよりも大きくなった。

「はぁーい！！」

あかりは、鞆とスポーツバッグ両手に、部屋を飛び出し、転がるように階段を降りていった。

「ママ、朝食は？」

「そんな時間ないでしょ、それでも食べてなさい！」

母親はあかりの口に食パンを突っ込んだ。

「いつふえきまふ」

あかりはパンを口にくわえたまま、家を出た。

普段ならそこから学校まで全力疾走のあかりだが、家の門を出ようとした瞬間、目の前に猫が現れた。

「あつ！！」

あかりは猫を踏みそうになって、慌てて足にブレーキをかけたため、前につんのめって、地面に手をついた。間一髪、猫はあかりのお腹の下で助かった。

「ひよつとお、あふないでひよ」

パンを口にしたままのあかりは、猫に注意した。

猫はひよいとあかりの顔を見上げると、そろそろとあかりに近寄り、あかりの足下で体をすり寄せた。

「何、餌が欲しいの？」

あかりのくわえたパンを猫にあげた。猫はパンをくわえると、あかりにひよこつと頭を下げて、つつつと走り去っていった。

「へえ、かわいいなあ猫。あつ、いけない、急がなきゃ」

あかりは靴を拾い上げると、猛スピードで学校へ駆けていった。

三 教室

夏川高校――

朝の長い始業式が終わり、あかりは新しい教室である2年A組の教室で担任の教師の来るのを待っていた。

「ねえ、あかり、知ってる？」

隣の席の神代由希が声をかけた。

「何を？」

「うちの今度の担任、新任の先生なのよ」

「そういう情報はこのあかりちゃんに任せて。確か藤野って名前よ」

「どんな先生かしら。背が高くて、スマートで、ハンサムで、お金持ちなら最高よね」

由希は夢見るような口調で言った。

「あのね、教師にそこまで要求するのはむごすぎない」

あかりは苦笑した。

「だって、それぐらいの条件がなくちゃ、二人で駆け落ちなんてできないわ」

「誰が駆け落ちするのよ」

「誰って、わたしに決まってるじゃない」

「校内マラソンで百メートルも走らないで、棄権した根性なしが、駆け落ちな

んでできますかねえ」

「あら、愛はどんな困難も乗り越えられるのよ」

「よく言うわよ」

あかりは呆れたように言った。

その時、教室の戸が開いた。

教師が入ってくる。

「げっ、沼田かよ！」

あかりは思わず口走った。

「町田、今なんか言ったか」

と教師。

「い、いいえ、何でもありません」

あかりは笑ってごまかした。

沼田は教師歴十年目の強面教師。厳しい指導の反面、性格が大人げないことから、生徒からは恐れられるどころか、陰でバカにされている。

「ええ、このクラスの担任の藤野祐介先生は急病のため、今日は来られません。したがって、今日は私が代わりをやります」

「ええーっ」

沼田の言葉に生徒が一斉に反発の声を上げる。

「やかましい！！ぐだぐだ言ってる、ここの担任になっちゃうぞ」

その途端、クラスが急にシーンとなった。

こ、こいつらあ……

沼田は腹の中で拳を震わせていた。

四 帰宅

夕方――

学校からの帰り、あかりが自宅に入ろうとすると、足にくすぐったいものを感じた。

何だろ。

あかりがひよいと下を見ると、一匹の猫があかりの足に体をすりつけている。

それは今朝、見た白猫だった。

「あら、猫ちゃんじゃない」

あかりはしやがんで、猫の頭を撫でた。

「ニャー」

猫はあかりの顔を見上げながら、かわいい声で鳴いた。

「餌が欲しいの？」

あかりがそう言うと、言葉がわかったのか、あかりの足にまた体をすりつける。

「わかった、ちよつと待ってて」

あかりは立ち上がって、すぐに家に入ると、台所の冷蔵庫からミルクを、食器棚から皿を持って、また猫のところへ戻ってきた。

「とりあえず、これでも飲んで」

あかりは皿にミルクを入れてやった。

猫はすぐにミルクを飲むのかと思いきや、そうではなく、庭の方へ顔を向けると、誰かを呼ぶように鳴いた。

「ん？」

あかりが、そちらの方を見ていると、少したって、庭にある鉢植えの植物の陰から、子猫が三匹、そろそろと現れた。

子猫たちは親猫の声で出てきたものの、あかりを警戒して、なかなか親猫の方に近づいてこなかった。

「ニャー」

しかし、親猫がもう一度、鳴くと、子猫はようやく歩き出し、あかりの様子をちらつちらつと見ながら、近づいていった。

あかりは子猫を脅かさないように、じつと動かず、黙って見ていた。

子猫たちは皿のミルクまで来ると、もう一度、様子をうかがうようにあかりを見て、それからミルクを飲み始めた。

子猫たちは一度、ミルクを飲み始めると、まわりのことは気にせず、一心不乱に飲み続けた。親猫はその様子を見守っていた。

かわいい。飼いたいなあ。

あかりは猫たちがすっかり気に入ってしまった。

「姉ちゃん、ただいまあ」

その時、あかりの妹、珠美が帰ってきた。

「ああつ、猫だ、かわいいっ!!」

珠美が猫を見て、大きな声を上げると、子猫たちはびっくりして、一目散に

庭の方へ逃げてしまった。

「あれ、逃げちゃったあ」

「珠美が大きな声だすからよ」

「ごめん……」

しかし、親猫の方は堂々としたもので、珠美を見ると、挨拶するように「ニヤン」と鳴いた。

五 喧嘩

その夜の夕食、あかりは珠美と協力して、猫を飼ってくれるよう両親の説得に出た。

「ねえ、ママ、猫飼ってよ」

あかりは夕食そつちのけで交渉に当たっていた。

「駄目よ、猫なんて。世話が大変なんだから」

母親はあかりの要求を却下した。

「世話はあたしがちゃんとするから」

「あかりはクラブで帰りが遅いでしょ」

「その時は珠美がやるわよ、ねっ」

「え、あたしーいだっ」

珠美が断ろうとするのを素早く察したあかりは珠美の足を思いつき蹴飛ばした。

「昼間はどうするの？」

「昼間は外で遊ばせておけばいいじゃない」

「そういうわけにもいかないでしょ。飼うとなれば、家にも勝手に入ってくるし、部屋の掃除が大変よ」

「掃除はあたしがする」

「自分の部屋も満足に片づけられないのに、猫の掃除がどうして出来るの？」

「今度から部屋も片づけるから」

「そんな口約束は聞きたくありません」

母親は全く請け合ってくれない。

「ねえ、パパ、何とか言ってくれよ」

あかりは今度は父親に頼み込んだ。

「おまえの飼いたい猫というのはどういう猫なんだ」

「今朝、家の前で偶然に会ったの。すごい慣れてて、かわいいのよ。子供も三匹いて」

「子供もいるの！冗談じゃないわよ」

母親は大きな声を上げた。

「それで、その猫は今、どこにいるんだ？」

「二階のあたしの部屋——」

「あかり、まさか、もううちへ入れちゃったの」

母親の顔が青くなる。

「だって、かわいいんだもん」

「あかり、すぐに猫を捨ててらっしゃい」

「やあよ、もうあの猫、あたしのなんだから」

「いけません！そんな野良猫、うちなんかに入れたら、うちが汚れるでしょ」

「汚くなんかないよ。きちんと洗えば、きれいになるもん」

あかりは向きになって、言った。

「駄目です。あかりが言うこと聞かないなら、ママが猫を追い出します」

母親は椅子を立って、台所で出ようとする、あかりも立ち上がって、慌てて母親を止めに入った。

「お願い、飼わせて！！」

「駄目よ」

あかりと母親はすっかり取っ組み合いになっていた。父親も珠美も二人の間に割って入る勇気がないのか、すっかり傍観者になっている。

「いいかげんにしないと、来月から小遣い抜きよ」

「猫飼っていいんなら、それでもいいもん」

「食事もなしにするわよ」

「そんなことしたら、あたし、猫と一緒に家出するから」

「やれるもんなら、やってみなさい！」

二人の親子喧嘩が小休止に入った。あかりも母親も息が上がっている。

「母さん、落ちついて。あかりもこんなに真剣なんだし、しばらく様子を見てみたら」

父親がようやく仲裁に入った。

「そんなこというけどね、結局、最後は私が世話することになるのよ。前に飼

つてたハムスター、あかりが自分で飼うつて言うから、買って上げたのに、たった三日で世話を投げ出したのよ」

「そんなの、八才の時の話じゃない。今度はちゃんと責任持つわ」

「誓約書、書く？」

「おまえ、何もそこまで言わなくても」

「あかりに聞いているの。どうする？」

「誓約書、書いてどうするの？」

「そうね、もし猫を飼う約束を守れなかったら、あかりにはクラブを辞めて、塾へ行ってもらわよ」

「塾……」

母親は、以前、あかりに英才教育を施して、有名小学校に入れようとしたが、あかりが幼いながらに激しく反発して、失敗したことがあった。そのしわ寄せが、今、妹の珠美の方に行っている。

「どうする？」

「わかった、飼わせてくれるんなら、何でもする」

しばらく考えた後、あかりは答えた。

六 名前

「今日から、おまえたちはあたしの家族だからね」

あかりは浴室で、猫たちの体を洗いながら、ご機嫌な様子で言った。
「ミャー」

猫たちは体を洗われることになれているのか、おとなしくしている。

「お姉ちゃん、大丈夫？」

湯船につかっていた珠美が心配そうに尋ねた。

「何とかなるわよ。この猫、本当に頭がいいんだから。そういえば、まだ名前、つけてなかったわね」

「お姉ちゃん、それならわたし、もう考えたんだけど」

珠美が言った。

「どんな名前？」

「親猫の名前は、ミーシャ。子猫のうち、白のはリリー、白に黒の斑のあるやつはアリス、黒いのはハンナ」

「何よ、その名前」

「変？」

「変じゃないけど、あたしの考えてるのはね、親猫がシロ、子猫の白いのはタマ、白と黒のはブチ、黒いのはクロー」

「それは猫たちがかわいそうよ」

「いいじゃない、庶民的で」

「そんなどこにでもあるような名前じゃ、親近感、わかないよ。絶対、ミーシヤがいいって」

「シロでいいじゃない。わかりやすくて」

「ミーシヤがいい」

「あたしが飼うのよ」

「それなら、わたしが協力しなくていいの。お姉ちゃん、塾へ行くことになっちゃうわよ」

珠美が悪戯っぽく笑って言った。

「うー、こうなったら、猫たちに聞いてみよ。ねえ、シロ、あたしの付けた名前の方がいいわよね」

「ミヤー」

親猫が答えた。

「嫌だつて言つてる。やっぱり、ミーシャがいいのよ」

「ミヤー」

「いんや、今、シロの方がいいつて言つたわ」

二人は勝手に親猫の言葉を解釈している。

カサツ。

その時だった。外で草を踏む音がした。

二人はその音に急に黙り込み、顔を見合わせた。

「なに、今の音？」

「珠美、何かしやべつてて」

「あかりが小声で言つた。」

「うん。じゃあ、歌でも歌う」

珠美は歌謡曲を歌つた。

その間にあかりはシャワーの湯を最大に熱くして洗面器に入れた。草を踏む音は確実に浴室に近づいていた。

珠美の歌は緊張のあまり震えている。

浴室の小窓に黒い人影が映った。

今だっ！

「この変態っ！」

あかりは勢いよく窓を開け、洗面器の熱湯を外に向かって、ぶっかけた。

「ぎゃあ！」

黒い影は悲鳴を上げ、慌てて逃げていった。

「コラーツ、待ちなさい、逃げるなんて卑怯よ」

あかりは窓の外に向かって、怒鳴った。しかし、人の気配はもうない。

「あたしの裸を覗こうなんて百年早いんだから」

あかりは呼吸を乱しながら、言った。

「今のお姉ちゃん顔見たら、二度とここへは痴漢に來ないと思う」

珠美はあかりに聞こえないような声でぼつりと言った。

七 新任教師

翌朝――

夏川高校の二年A組の教室では、昨日病気で休んだ新任の教師の話題が依然
続いていた。

「昨日はがっかりさせられたけど、今日こそは大丈夫よね」

由希はまだ新任の教師に期待をかけている。

「ふわああ」

あかりは大きなあくびをした。

「どうしたの、あかり、もう五月病？」

「昨日さ、風呂に入ってたら、覗き魔が出たのよ」

「覗き魔？それで？」

「熱湯かけて撃退したわよ」

「撃退――すごいわね」

「あー、それなら、あたしの家にも変な人がいたの」

深沢美保が二人の会話に割って入った。

「あんたでしょ」

あかりと由希が美保を指さした。

「ひどーい。そうじゃなくて、変な人があたしの家の周りをうろついてたの。お父さんが注意しに外へ出たら、逃げちやっただけだ」

「そういえば、最近、痴漢が多いみたい。うちの町内って」

由希が言った。

その時、始業時間のチャイムが鳴った。

「さあ、来るわよ、先生が」

由希はわくわくした様子で言った。

「期待しない方がいいと思うけど」

数分して、教室の戸が開いた。

教師が入ってくる。

「げっ、またハゲでデブだ」

由希は昨日と同じことを口走った。

教師がきつと由希を睨む。

由希は慌てて口を覆った。最初に入ってきた教師は昨日の沼田であった。

しかし、今日は沼田の後にもう一人の教師が入ってきた。

その教師の顔を見た途端、女子生徒たちから歓喜の声があがる。

「び、美形……」

由希は目を輝かせて、呟いた。

新任の教師は背が高く、スリムで、アイドル系の顔立ちをした男だった。

沼田と新任教師は教壇の上に立った。

「今日から君たちのクラスを受け持つ藤野先生だ。では、藤野君、頼んだよ」

沼田は出席名簿を藤野に渡して、教室を出ていった。

生徒たちは藤野がしゃべるのを待っていた。

しかし、藤野はなぜかぼうつとしたまま、何もしゃべろうとしない。まるで目の前の生徒たちが眼中にない様子である。

先程まで藤野を羨望の眼差しで見っていた女生徒たちの見方も変わってきた。

藤野は確かに現代風の若者の顔立ちでかっこいいが、服のセンスはあまりいいとは言えず、表情も疲れ切ったような様子で覇気がなく、冴えない。右手には白い包帯を巻いていた。

「先生」

前の席の生徒が藤野に声をかけた。

「……」

しかし、藤野はぼんやりしているせいか、生徒の呼びかけに答えなかった。この態度を見て、生徒たちは隣同士でこそこそと藤野のことを話し始めた。

「なあに、あの先生」

「変よね、やる気あんのかしら」

「ぼけてんじやないの」

「ええっ、あの年で、やだあ」

最初は静かだった教室もざわざわし始めた。

しかし、藤野の方は全然気にならないのか、まだぼんやりしている。そうだ。

あかりはそんな藤野を見ていて急に悪戯心が湧いてきた。

「ねえ、倉田君、軟球持ってたよね」

あかりは後ろの席の倉田昇に言った。

「持ってるけど、どうすんだよ」

「ちよっと貸して」

あかりは倉田から野球の軟式ボールを受け取ると、座席に座ったまま、藤野の方へ思いつき投げた。

ポカッ！！

ボールが思ったより早く飛んで、藤野の顔面に直撃した。

うそお、まじで当たっちゃった

あかりは少し外して投げたつもりだったが、後の祭りである。

「いたっ」

藤野は一瞬間を押さえ、目をぱちりと開いたと思うと、次の瞬間にはその場に倒れてしまった。

「あわわ、どうしよう」

あかりは口を押さえた。

「あーあ、あかりが飛んでもねえ事やったぞ」

倉田がみんなに言いふらした。

「せ、先生が弱すぎるのよ、先生が」

あかりは言い訳したが、周りの視線は既に冷ややかだった。

八 保健室

「ううん」

藤野が保健室のベッドで目を覚ました。

ベッドのそばでは、あかりが心配そうに藤野の顔を見ていた。

「あれ、ここは——」

藤野はあかりを見て、言った。

「保健室です」

「どうしてここに——確か何かが顔に当たって……それから、急に気が遠くなつて」

「先生、ごめんなさい。実は先生がぼんやりしてたもんだから、つい悪戯心で野球ボールを先生の顔面に投げてしまつたんです」

あかりが謝った。

「ボールを？そりゃあ、ひどいよ」

「ごめんなさい。まさか、あんなに強烈に当たるなんて思わなくて」

「君つて馬鹿力なんだね」

「馬鹿力……」

あかりは内心カチンときたが、悪いのは自分なので文句も言えない。

「でも、よかった。先生の意識が戻って。あたし、死んだらどうしようかと思つて。ほら、今から犯罪歴ついちゃうと、将来心配だし——」

「君ね、先生より自分のことの方が心配だったのか」

藤野は起き上がった。

「そ、そんなことないです。はい。ちゃんと反省してます」

あかりは肩をすぼめた。

「でも、先生だつて、悪いんですよ。教壇に立ったまま、ぼんやりして出席も

とらないんだもん」

「あつ、ごめん。ちよつと猫のことを考えたからな」

藤野は頭をかいた。

「猫？」

「おととい、この町に引越してきた時、猫が——君には関係ないことだ。気にしないでくれ」

「別に気にしてないけど。とにかく、そんなことだと、あたしみたいな生徒になめられちゃいますよ」

「そうだな、気をつける」

「あつ、そういえば」

あかりが思い出したように言った。

「？」

「教室に入ってきた時から気になっていたんですけど、右手の包帯、どうしたんですか？」

「え？ああ、これね、やかんのお湯で火傷したんだ？どじだろ？」

藤野は笑った。あかりもつられて笑ってしまう。

この先生、何か面白い。

何となくあかりは藤野のことが気に入ってしまった。

九 夜道

その夜、あかりは子猫たちとベッドで遊んでいた。母との約束で猫が入れるのは二階のあかりの部屋だけに限定された。それでミーシャたちは朝、あかりと一緒に外へ出て、夕方、あかりが帰る頃、窓からあかりの部屋へ戻ってくることになった。

「リリー、おまえはパンダみたいでかわいいね」

あかりは白に黒いブチのある子猫を抱き上げた。

「ニャー」

「え、なに、そっか、おまえはリリーじゃなくて、アリスだっけ。全く覚えにくいなあ」

あかりは子猫たちと遊んでいる間、母猫のミーシャはベッドの下で丸くなっている。どうやらミーシャはベッドと床の間の狭いスペースが気に入ったようだ。

コンコン。

部屋のドアをノックする音がした。

「あかり、いる？」

と母の声。

「何？開いてるわよ」

あかりはドアの方を見て、言った。

ドアが開いて、母が部屋に入ってくる。

「あかり、悪いんだけど、珠美のこと、駅まで探しに行ってくれる？」

「珠美、まだ帰ってないの？」

「そうなの。塾はとつくに終わってるはずなんだけど」

「ゲームセンターにでも寄ってるんじゃない」

「珠美はあんたとは違うわよ」

「ああ、そうですか。まあ、ジュースでも買いに行くついでに行ってくるわよ」

「お願いね。駅に着いたら、うちに電話して」

「わかった。ミーシャ、一緒に行こう」

あかりは猫を抱き上げた。

「あーあ、美智子のプリクラに並ぶのつきあってたら、すっかり遅くなっちゃった」

珠美は駅から自宅への帰り道を歩きながら、つぶやいた。

この道、暗いから嫌なのよね。

珠美は途中の街灯のない細い道を通る時、いつも不安になった。

早足で通り過ぎちゃお。

珠美が歩く速さを早めた。

！！

その時、ふつと誰かとすれ違ったような気がして、少し歩いてから、足を止め、振り向いた。

誰か、立ってる。

珠美はぎよつとした。

長身の男が塀につかまり、つま先をいっばいに伸ばして、塀の中をのぞき込んでいたのである。

のぞき魔だわ。どうしよう。

その時、長身の男が珠美の方を向いた。

ギクツ！

珠美は一瞬、金縛りにあつたように動けなくなつた。

男は塀から手を離し、ゆつくりと珠美に近づいてくる。暗がりでも男の顔は全く見えない。

「こ、こないで」

珠美は後ずさつた。

「ま、まて」

「きゃあー」

珠美は後ろも振り返らず逃げ出した。

男も珠美の後を追いかける。

「はあ、はあ、何でこんなことになるの」

珠美は脇腹を押さえながら、自宅に向かって全速力で走っていた。

「あっ！」

そんな時、珠美は足がもつれて、転んだ。

「いたた……」

珠美が呻いた。

黒い影が珠美の体を包んだ。

「はっ」

珠美のすぐそばに、珠美を見下ろすようにして男が立っていた。

「お願い、助けて」

珠美は震えた声で言った。

男は腰をかがめ、珠美に襲いかかる。

その時だった。

スチール缶が男に向かって飛んできた。

「ふがっ！！」

スチール缶が男の顔面に命中し、男は後ろへ倒れた。

「痴漢野郎、ついに見つけたわよ」

自転車に乗ったあかりが言った。

「ミヤー」

自転車のかごに乗ったミーシャも声を上げる。

「お姉ちゃん！」

珠美が声を上げた。

「珠美？」

「お姉ちゃんっ！」

珠美は立ち上がり、あかりに抱きついた。

「大丈夫？」

「うん」

「後ろへ下がってなさい」

男がよろよろとしながら、立ち上がった。

「！」

男はあかりたちの方を見ると、ものすごい勢いで飛びかかった。

「お姉ちゃん、危ない！」

珠美が叫んだ。

「負けないわよ」

あかりも負けじと自転車の勢いをつけ、男に向かっていく。

「マリナあ！！」

男が叫んだ。

「誰がマリナじゃ、このヘンターイ！」

あかりは向かってくる男に向かって自転車ごと体当たりを喰らわせた。

「マリナ！」

男がぶつかつたひょうしに自転車のかごにいたミーシャを抱き上げた。

その瞬間、あかりの右フックが男の顎に炸裂した。

男はミーシャを抱きながら、冷たいアスファルトの地面に沈んだ。

「ふっ、終わったわ」

あかりはズキズキする右拳をさすった。

「さあ、痴漢野郎がどんな顔なのか見てやるわ」

あかりは自転車から降りて、男の顔をのぞき込んだ。

「ふ、藤野先生……」

あかりの顔がひきつった。男はあかりの担任藤野だったのである。

「ううっ、マリナ……」

藤野が呻く。

まさか、藤野先生がのぞき魔だったなんて。そういえば、右手の火傷、もしかしてあたしがお風呂でかけた熱湯で……。でも……

あかりは頭の中が混乱していた。

そんな時、あかりは、心配そうに藤野の顔をなめているミーシャの姿を見た。

おととい、この町に引越してきた時、猫が――

その瞬間、保健室での藤野の言葉があかりの脳裏によみがえった。

まさか。

「ミーシャ、もしかしてあなたの飼い主、藤野先生なの？」

あかりはミーシャに尋ねた。

ミーシャは顔を上げ、あかりの顔をじつと見つめると、「ニャン」と鳴いた。
「そう、そうなのね」

あかりは小さくうなづく。

藤野先生、ミーシャたちを探すためにあちこちの家を覗いてたんだわ。本当に猫たちのこと、心配してたのね。

「お姉ちゃん、警察、呼ぶ？」

珠美はあかりのそばに恐る恐るやってきた。

「さあ、帰ろう」

あかりは珠美の方を向いて、言った。

「へ？」

「お母さん、心配してるわよ」

あかりはミーシャを抱き上げ、自転車のかごに乗せた。

「この痴漢はどうするの？」

「え？痴漢、どこにいるの？見えないわねえ。さて、帰らなきゃ」

あかりはさっさと自転車に乗って、その場を去っていく。

「ちよつとお姉ちゃん、待ってよ」

男と一緒に取り残されるのを嫌った珠美は慌ててあかりの後を追いかけていった。

十 終章

翌朝、藤野の住むアパート。

「まいったな、今日、どんな顔で学校へ行けばいいんだろ」

額に貼られた絆創膏を鏡で見ながら、藤野はつぶやいた。

「赴任たった一日でこの学校ともお別れかあ。いや、生徒に痴漢と思われたんだもんなあ、教師としても最後かもしれない」

藤野は憂鬱な面もちで背広に着替えると、アパートの部屋を出た。

そして、外の階段を下りようとした時、

「藤野先生」

と誰かが藤野を呼び止めた。

藤野が振り向く。

「君は確か町田……」

「町田あかりです」

段ボール箱を両手に持ったセーラー服姿のあかりが笑顔で言った。

「昨日は——」

藤野が何か言いかけた時、

「先生、落とし物ですよ」

と、あかりが藤野に段ボール箱を押しつけた。

「これは？」

「ミーシャー——じゃなかった、マリナをよろしくね。じゃあ、学校で」

あかりはそういうと、階段を降りていった。

藤野は段ボール箱をその場に降ろして、ふたを開けた。

「ミヤー」

中から一匹の猫と三匹の子猫が現れた。

「マリナ……」

藤野の顔が明るくなった。

段ボール箱には一枚のカードが入っていた。

藤野がそのカードを手にする。

そのカードにはこう書かれていた。

『先生、マリナが心配なのはわかるけど、人の家をのぞくと痴漢と間違われちゃうぞ。気をつけてね。町田あかりより』

おしまい